

## 佳作

### 支え合う世界へ

宮城県仙台二華中学校

3年 伊藤 美優

「小児科医になる。」私が、6年前から言い続けている言葉。あきらめられない夢。

私が小児科医を目指すようになったのは、小学3年生の時。先程までどんなに親があやしても泣きやまなかった子どもが、診察室から出てきた時笑顔になっていたことに大きな衝撃を受けたのがきっかけだった。それからは小児科に行くたびに、どんどん小児科医になりたいという気持ちが強くなっていった。自分の体調や気持ちをうまく伝えられない子どもたちに優しく語りかけ、診察し、治療する。毎日、長時間、ずっと子どもたちを相手しているのに笑顔は絶対にくずれない。私は、どんなスーパーヒーローよりもかっこいいと思った。私もこうなりたい。子どもたちを笑顔にしたいと、強く思った。

それからは、小児科医になるためにはどうしたらよいかをたくさん考えた。必要な知識や、やるべきことが山のようにあることを知った。

たとえば、コミュニケーション能力。うまく言語化ができない子どもたちと会話をしなくてはならないし、ご両親に治療の内容や病気の知識、アドバイスなどをしなければならぬからだ。そのためには、コミュニケーション能力は必要不可欠なのだ。

ほかにも必要なことはたくさんある。正しい知識を持つことや、それらを分かりやすくまとめること。「正しい情報」というものは、だれにとっても安心材料になるのだ。そして、たくさんの方が「正しい情報」を持つことでデマや誤報にまどわされる人々が減り、事故や事件の減少につながるのではないだろうか。

たくさん調べ、たくさん考え、小児科医について少しくわしくなった。そんな時、ふと頭に不安がよぎった。本当に、私は小児科医になれるのだろうか。私があこがれた先生のように、なれるのだろうか。私は、楽しいうれしいと思えないときっと上手に笑えないし、意思の疎通が難しい子どもたちに対してすぐにイライラしてしまうのではないか。私は、全員に等しく優しくできるだろうか。良くない考えが、頭の中をぐるぐると回った。そもそも、人を助け笑顔にするというとても難しく楽しい仕事を楽しめるのか。楽しいと思うことは他にたくさんあるのだし、趣味を仕事にするのもいいんじゃないか。いや、むしろ私にはその方が合ってるかも……私は医者に向いていないのかもしれないし。

そしてまた、たくさん考えた。毎日毎日、頭を離れることはなかった。それなのに、答えは一向に出てこない。どうしたものかと頭を悩ませている時、弟が体調をくずした。最初は、病院に付いて行く気などまったくなかった。ただの気まぐれだった。やることも特になかったし、家に一人でいるのも何だからと、付いて行くことにしたのだ。

いつもの、見なれた病院。さまざまなキャラクターの絵が壁にはられ、病院とは思えないほどファンシーだ。弟の名前が呼ばれる。診察室には、何度も何度も見た、先生の優しい笑顔。マスクをしていてもはっきりと分かる、温かさ。ものの数分で、弟が笑った。さっきまで、あんなに嫌そうにしていたのに。まるで、景色が色づいたみたいだった。そうだ、私は、この人に憧れて、小児科医になりたいと思ったのだ。何が他の仕事でもいい、だ。挑戦もしてないのに、何であきらめようとしてたんだ。泣きそうだった。自分の、気持ちの弱さに。夢への執着心の弱さに。ぐっと、下くちびるを強く噛んだ。跡がくっきりと付いてしまうほどに。それぐらい泣きたくなかった。憧れの先生の前で、笑顔で人を笑顔にする人の前で、涙は見せたくなかった。私はマスクの下で、にこりと笑った。

私の夢は、小児科医だ。きっと、ずっと変わらない私の夢。笑顔で人を笑顔にさせる、温かい仕事。人を助ける、かっこいい仕事。今なら胸を張って、大声で言える。

命を一人でつなぐというのは、限りなく不可能に近い。皆、だれかしらに支えられて生きている。私は、支えられてきた分、だれかを助け、支える柱になりたい。困った時、頼られるような人になりたい。恩返しができるように、だれかの力になれるように。少しでも多くの人を笑顔にできるように。そうなるために、今の自分をみがき続ける。たくさんの人を支えられる柱になるまで。